医療の架け橋

日本・ミャンマー医療人育成支援協会

クリニック6軒寄贈

設立5年半 広がる支援の輪

◇上◇

研修生受け入れやクリニック寄贈などミャンマーの医療環境充実に努めるNPO法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」（岡山市）。06年3月の設立から5年半を越え、支援の輪が広がっている。賛同する会員は岡山、広島を中心に全国に約500人、今年4月には福山市に支部を開設した。10月末～11月初め、メンバーに同行し現地を訪問、支援活動を取材した。【村本聡】

ミャンマーの最大都市ヤンゴンから車で北東に約1時間のイエモン村。同会メンバーらは、村に唯一の診療所を訪れた。屋根は08年のサイクロンで飛んでしまい、トタンで応急処置したが、老朽化が進んだ診療所を建て直すことになり、下見をするためだ。同会が寄贈する6軒目の医療施設は、待合室や診察室、薬局、助産師の居室などを備えた「井上クリニック」。

資金を寄付したのは、岡山県倉敷市の元会社経営、井上浩さん（78）。元岡山大医学部長の岡田茂・同会理事長（71）の思いに共鳴した。「ミャンマーが、日本が終戦直後で生活に困窮していた時代に重なって見えた。温厚で信心深い人柄に魅せられ、何かお役に立てないか」と200万円を贈った。

「井上クリニック」の完成図を前に、現地の担当者（左）と打ち合わせる井上さん（中央）、岡田理事長＝ミャンマー・ヤンゴンで10月31日

同会が初めてクリニックを寄贈し完成したのは、08年3月。それまで例がなく、「個人から公共施設の寄贈は受けない」との姿勢のミャンマー政府と3年に及ぶ交渉の末に実現した。完成直後の同年5月、13万人以上の死者・行方不明者を出したサイクロン「ナルギス」が襲来。クリニック周辺の家屋はみな倒壊したが、建設されたばかりの鉄筋作りのクリニックは頑丈で、災害医療の拠点となった。

その後も、同会会員の個人や企業からの寄付、街頭募金で被災地を中心にクリニックを贈り続けている。サイクロン被害にあった診療所はまだまだあり、ヤシの葉でふいたような、民家とも言えない応急施設で無理やり診療しているところもあるという。

井上クリニック建設地の診療所は、診察室にベッド一つだけの簡素な作り。だが、ミャンマーの農村部では、これが一般的という。平均寿命60歳で、人生で一度でも診察を受けられるかどうか、という人も多い。クリニックの引き渡し式には、村中の人が出てきてお祝いをする。いつでも安全な医療が受けられるクリニックは村人の念願だ。医療が行き届かない不衛生な環境で、ほとんどが自宅分娩のため、妊婦の死亡率は日本の約50倍。少しでも妊婦を救おうと、産室を併設したクリニックの寄贈も進めている。

サイクロンで水没した村にクリニックを再建した、同会福山支部長の西山央子さんは「現場を見た人は『なんとかしたい』と思うはず。私が20回余り見てきたミャンマー医療の現状を、1人でも多くの人に伝えたい」と話す。

クリニック建設予定地にある、村唯一の診療所。簡素な作りだが、農村部ではこれが一般的だ＝ミャンマー・イエモン村で10月30日